

書誌情報の評価をめぐって

坂 敏弘

On the appreciation of the bibliographical information

Toshihiro Ban

Bibliography generally means The listing of books, including the list of author's works, the list of references to show the sources used by the author, the collected contents of the magazines, and, in the broad sense, the personal history and the chronology and so on. The study of modern bibliography has, however, made so little progress that such a classification is ambiguous. This stagnation of the bibliography partly causes the general low understanding of it. It seems evident that the bibliography is most important in the study of literature, but in fact it is valued lowly in spite of its importance. The reason is mainly that it is not in the essential parts of literature but in the marginal parts. In addition, it is owing to the difficulty of appreciation of it. Though it must be appreciated in the peculiar viewpoint which is different from the viewpoint of the study of literature, it is not yet made a trial.

There are three conditions of the bibliography which are the inclusiveness, the accuracy and the usefulness. The word of usefulness is not necessarily proper. It may be defined as to be easy to use or to be used by anybody in other words. In this point, you may replace it with the commonality. You can add the promptness and the continuity to these three conditions above.

日本近代文学に関する書誌評価法（抜粋、一部改稿）

かつて藤野幸雄氏は、文献目録（＝書誌）の条件について次のように書いている。

文献目録の目的は、現にある文献＝書誌情報を一般に知らせるところにある。この目的にかなうためには、いくつかの条件を満たすことが必要となろう。文献を完全に網羅している、記載された情報が正確である、自分以外の利用者にも使えるようになっている、これが文献目録の三大条件と言ってよい。もちろん速報性も重要ではある。が、それはあるにこしたことはないとはいえ、本質的なものではなかろう。（「図書」352号 78. 12）

藤野氏の言う〈文献目録の三大条件〉を簡単にすれば、①網羅性、②正確性、③共有性ということになるだろう。この点について、上妻精氏も〈文献目録の具うべき条件としては、網羅性、記録性、正確性、客観性、有用性などが挙げられる〉（「書誌索引展望」6巻1号

82. 2)とし、藤野氏と重複する条件を提出している。以下、藤野氏のあげた〈文献目録の三大条件〉について論述することにしたい。

まず、①網羅性についてはいまさら言うまでもないだろう。書誌とは文献を探すためのツールであるから、そこに記載されなければ、重要と思われる文献も埋もれてしまう危険がある。文献の存在を知らせることが目的であるなら、当然、網羅的でなければならないだろう。ある文献が落ちていた場合、知らなかったのか、それとも、意図的に省いたのかは書誌作成者の根幹にかかわる問題である。もし、知らなかったのなら、文献探索法に欠陥があったと言わざるをえない。それが、特に、二次文献によって発見することができるような文献であったとしたら重大なあやまちであり、書誌作成者としては失格である。

また、その文献を意図的に省いたと言うなら、何故省いたのかが明確になっていなければならない。〈凡例〉で断っておく必要があるだろうし、もし、主要文献に限ったということであれば、題名を〈主要文献目録〉とすべきであろう。あるいは、探索不十分で遺漏が多いと思われる場合は〈文献目録稿〉と〈稿〉の字をつけるべきであろう。

しかし、一般に書誌は網羅的であることが常識であるので、とにかく、網羅性を追求し遺漏のないように文献探索すべきである。あまりにおそまつな書誌の発表は控えることも必要だろう。

②正確性とは、書誌事項の正確さということである。このことは、現物照合ということと関連する。正確であるためには、先行書誌や二次文献などの記述をうのみにしないことが大切である。また、転記ミス、校正ミスなどは細心の注意を払ってもなくならない。先行書誌をそのまま転記することはのちのちまであやまった文献の存在を示すことになるので戒めねばならない。また、その書誌の信用度にもかかわるので十分注意すべきである。谷沢永一氏は、現物確認にうるさいことで有名だが、その点について次のように書いていて興味深い。

手間惜しみ未確認の引き写しを、そうと注記せず知らぬ顔で嵌めこんであれば、疑いを他にも及ぼしたくなるのは自然であろう。現物未見のものだけを率直にシルシものか何かで明記する措置により、逆に、労を払った実物確認文献の信憑性を主張し得るのだ。未見未確認を神経質に注記する方が、結果的に実はトクなのだという明快な事情が、現在でもまだ広く感得されるに至ってはいないようである。（「日本古書通信」43巻5号 78. 5）

谷沢氏は〈未見未確認を神経質に注記する〉必要性を説いているが、その通りであろう。未見の文献の書誌事項は不正確な場合が多く、それはそれとして注記した方が、それ以外の文献の記述の正確さの証左になるというのである。

③共有性とは、藤野氏の言い方によれば〈自分以外の利用者にも使えるようになっている〉ことだが、言い換えれば、よく整理されているということであろう。書誌は作成した自分だけが利用するものではない。というより、他人が利用することを目的として作成されるはずである。したがって一般的には何らかの整理がなされている場合がほとんどである。多くは、年代順による配列になっているが、これだと研究の流れを知ることができるという利点がある。また、単行本と雑誌に分類することは、多くの図書館がこの二つを別々に配架していることから、現物を請求して見るのに便利である。

ほかに〈共有性〉のためには、雑誌・紀要の発行年月だけでなく巻号まで明記すること、

単行本に再録された場合は必ず列記すること、必要により注記をつけること、紀要等の場合の大学名（発行所）を補記することなどがあげられるだろう。また、巻末に索引をつけることも重要である。索引により検索がさらに容易になるのは間違いない。

さらに、文献解題も谷沢永一氏の言う〈本当に役に立つ文献をいかに選び出すか〉という観点から、今後必要になっていくものと思われる。

以上、〈文献目録の三大条件〉について論述したが最後に、理想的な書誌のその他の要点を書いておく。

藤野氏は〈本質的なものではな〉いとしているが、〈速報性〉も重要である。書誌は発表されたとたんに古くなると言われる。そして文献は常に新しいものが要求されるのが現状である。ごく最近の文献の探索は、とてもむずかしいが、逆に言えば最新文献を知らせることの重要性を物語っている。

そして、この〈速報性〉に関連して、書誌を引き続いて作成すること、すなわち〈継続性〉も重要な点である。ある時点までは作成したが、そこで止めてしまっただけでは、それは、必ずしも利用者のことを考えているとはいえないだろう。書誌が他人の利用することを目的としているからには、継続することは必須の条件である。この意味で、書誌作成は生涯続けるべき仕事なのである。

[90. 2. 7]

(「明治大学日本文学」18号 90. 8)

[94. 4. 3一部改稿]

〈書評〉佐藤勝著『資料石川啄木』（再録）

この本は〈Ⅰ湘南啄木文庫蔵書目録〉と〈Ⅱ啄木の歌と我が歌と〉の二部構成になっているが、〈Ⅰ〉の文献目録が全体の約四分の三を占めている。従って〈Ⅰ〉が中心になっていると考えられるうえに、〈Ⅱ〉に関しては既に紹介したものがあつた（矢口進也「図書新聞」92. 7. 4）ので〈Ⅰ〉のみに限って論評してみたい。

まず、表題の〈資料石川啄木〉であるが、この〈資料〉とはあくまで二次資料を意味しているものと言えよう。〈資料〉から啄木に関する直接的な一次資料を想像された方には期待はずれの感は否めない。〈Ⅰ〉の章題の〈湘南啄木文庫蔵書目録〉をそのまま書名に採用した方がわかりやすかつた気もするが、あとがきにあたる文章から推察すると発行者の福田信夫の提案であつたかもしれない。もちろん、二次資料すなわち書誌もまた重要な〈資料〉の一つにはちがいない。

次に、この本を石川啄木書誌（主に参考文献目録）としてとらえるなら、第一に、その網羅性に問題があると言わざるをえない。それは〈はじめに〉で断っているとおり、あくまで蔵書目録であり〈学術的専門誌や同人誌等に発表された文献の遺漏は多い〉と自ら書いていることから明白である。蔵書目録と言え、かつて『岩手県立図書館蔵石川啄木文庫目録』（86. 7）があつたが、個人蔵と図書館蔵との差は自ら積極的に文献を収集するか否かであろう。受入資料のみに頼りがちな図書館とちがい、著者は実にこまめに収集しているように感じられる。研究者からの寄贈資料（それは〈抜刷〉と注記されていることからわかる）も含まれているが、大学紀要は一般に非売品なのでやむを得ないものと思われる。欲を言えば、入手できなかった大学紀要等の文献についても目録に掲載してほしかつた。先行書誌にすぐれたものがあつただけに惜まれる。

第二に、正確性に関して、記載事項を〈二度にわたって確認〉したと書いているが、4800点という膨大な量では、誤記（誤植）も若干見られる。一例をあげるなら、75頁と208頁に上田博の同一文献が重複して記載されている。また、216頁に活字の横転が見られる。しかしながら、誤りが顕著なのは巻末の〈索引〉で索引としての機能を果たさないほど乱れたものになっている。索引は手作業で時間も制約されることが多いので同情の余地はあるが、注意すべきであったと思われる。また、誤りと言うわけではないが、一つの文献での書誌事項の記載順序が文献によって異なっているところが見られるのも気になる。

第三に、使いやすさという点で、レイアウトに工夫がほしかったように思われる。一段組より二段組の方が見やすい気がするし、一文献での二行めの折り返しを一字上げにするというあまり見られない記載方法はいただけない。見慣れた一字下げ、もしくは二字下げが好ましかったと思われる。また、雑誌特集号は全部追い込みにするのではなく、いわゆる細目の形をとった方が見やすいであろう。細かい点では頁の記入は全体の頁（量）ではなく何頁から何頁まで（位置）を示すのが妥当である。しかし、最も疑問に思われたのは、見出し（項目）のたて方と完全編年体の採用である。完全編年体には利点もないわけではないが、単行本と雑誌の混在は不都合を生じることが多い。この方式を取ったがゆえ、見出しを〈大正元年～昭和十九年〉、〈昭和二十年～三十九年〉、以降は十年ごとにたてているが、いささか区切りが大きすぎるように感じられる。一つ一つの文献に〈年〉までいれているものの、特に文献量の多い最近については一年区切りで見出しを立ててもよかった気がする。

著者は30余年にわたって啄木文献を収集し続けていると言う。その収集ぶりが一部には知られていたかもしれないが、これは地道な積み重ねがいつか開花することを物語っている。上田博がこの本のオビで〈啄木研究に、この一書は重い〉と書いているが、書誌が進めば研究も進むので、研究者による今後の啄木研究が期待されるであろう。

（1992年3月31日 武蔵野書房 323頁 2987円） [92. 8. 7]

（「古書店と読者の雑誌」77号 92. 12 高原書店）

参考文献（拙稿に限る）

- 1 「漱石参考文献目録の現在・雑感」（「解釈」38巻7号 92. 7）
- 2 「川端康成参考文献目録の現在・雑感」（「解釈」39巻3号 94. 3）
- 3 「日本近代文学における書誌をめぐる一参考文献目録を中心に」（「日本近代文学」48集 93. 5）
- 4 「漱石参考文献目録の現在・雑感（二）」（「解釈学」10輯 93. 11）
- 5 「宮沢賢治参考文献目録の現在・雑感」（「解釈学」11輯 94. 6予定）

※

「書誌日録」（「頌（オード）」1号～ 93. 2～）

※

『芥川龍之介書誌・序』（近代文芸社 92. 9）

付記

英文要約については、竹村雅彦氏（日外アソシエーツ）の手をわずらわせた。記して謝意を表したいと思う。

（日外アソシエーツ NICHIGAI ASSOCIATES）